令和６年度　全国学力・学習状況調査の結果概要

神戸町教育委員会

１　調査の概要

(1)　調査の目的

・　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における 児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

・　国から提供される調査結果を活用して、神戸町の児童生徒の学力や学習状況を把握し、教育指導の充実や学習状況の改善等に役立て、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2)　調査の対象学年

・　小学校第６学年、中学校第３学年

(3)　調査の内容

①　教科に関する調査（国語、算数・数学）

②　生活習慣や学校環境に関する質問紙調査

・　児童生徒に対する質問紙調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等）

・　学校に対する質問紙調査（指導方法に関する取組、人的･物的な教育条件の整備状況等）

(4)　調査日

令和６年４月１８日（木）

(5)　神戸町における調査を実施した児童生徒数（人）　※　当日実施児童生徒数のみ

		神戸町	岐阜県（公立）	全国（公立）
小学校	国語	155	15, 909	947, 364
	算数	156	15, 903	947, 579
	質問紙	160		
中学校	国語	144	15, 505	875, 574
	数学	144	15, 510	875, 952
	質問紙	144		

２　調査結果の概要

(1)　国語、算数･数学の学力の状況について

①　小学校

・国語では、「知識及び技能」の「情報の扱い方に関する事項」で、県や全国より高い平均正答率である。一方、「思考力、判断力、表現力」の「話すこと・聞くこと」に課題が見られる。

・算数では、「図形」や「データの活用」では、県や全国と同等の平均正答率である。一方、「変化と関係」に課題が見られる。

・平均正答率の分布は、国語は、全国や県と同様の傾向にある。算数は分布に若干のばらつきがあり、学力差が見られる。

②　中学校

・国語では、「知識及び技能」の「言語の特徴や使い方に関する事項」や「我が国の言語文化に関する事項」に関する問題で県や全国より高い平均正答率である。一方、「思考力、判断力、表現力」の「話すこと・聞くこと」に課題が見られる。

・数学では、「数と式」において、県や全国より高い平均正答率である。一方で「関数」に課題が見られる。

・平均正答率の分布は、国語では分布に若干のばらつきがあり、学力差が見られる。数学では県や全国と同様の傾向にある。

・問題形式による正答率は、国語では、記述式が県、全国より高い平均正答率である。数学では、短答式が県、全国より高い平均正答率である。一方、記述式にやや課題が見られる。

(2)　国語、算数･数学への関心･意欲等について

・小学校国語では、「好き」「大切な教科」「授業が分かる」と答える児童の割合が、県や全国と比較すると高い、あるいは同等である。中学校においても、「好き」「授業が分かる」と答える生徒の割合は、県や全国より高い、あるいは同等である。

・小学校算数では、「好き」「大切な教科」「授業が分かる」と答える児童の割合が、県や全国と比較すると高い、あるいは同等である。中学校においては「好き」「大切な教科」「授業が分かる」と答える生徒の割合は、県や全国より高い。

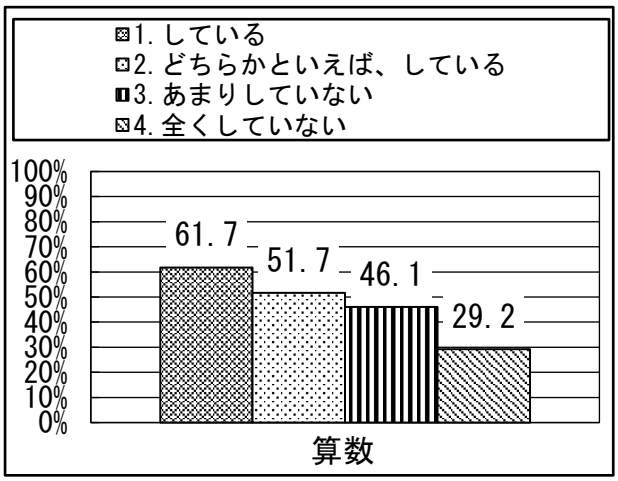
(3)　生活習慣について

・小学校、中学校ともに「朝食を毎日食べている」と回答する児童生徒の割合が、全国や県よりもやや低い。

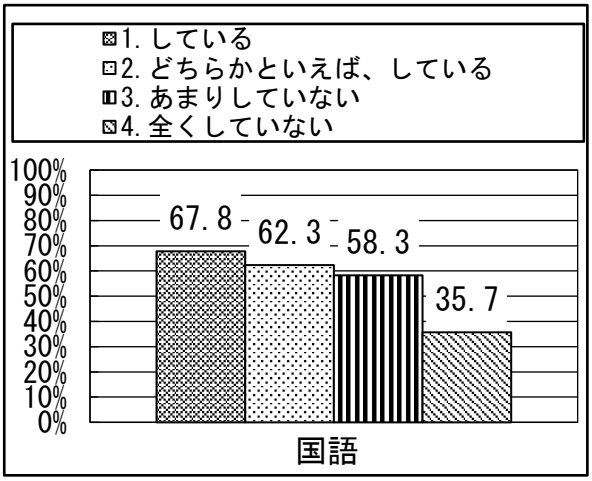
・小学校において、毎日、同じくらいの時刻に起きたり、寝たりする児童の割合が全国や県よりもやや低い。

・中学校において毎日、同じくらいの時刻に起きたり、寝たりする生徒の割合は全国や県と同等である。

・次のグラフは、今回の小学校の調査における「朝食を毎日食べていますか」と学力調査の正答率（図１）、小学校の「毎日同じ時刻に寝ていますか」と学力調査の正答率（図２）の関係である。規則正しく、望ましい生活習慣が学力向上には欠かせない。

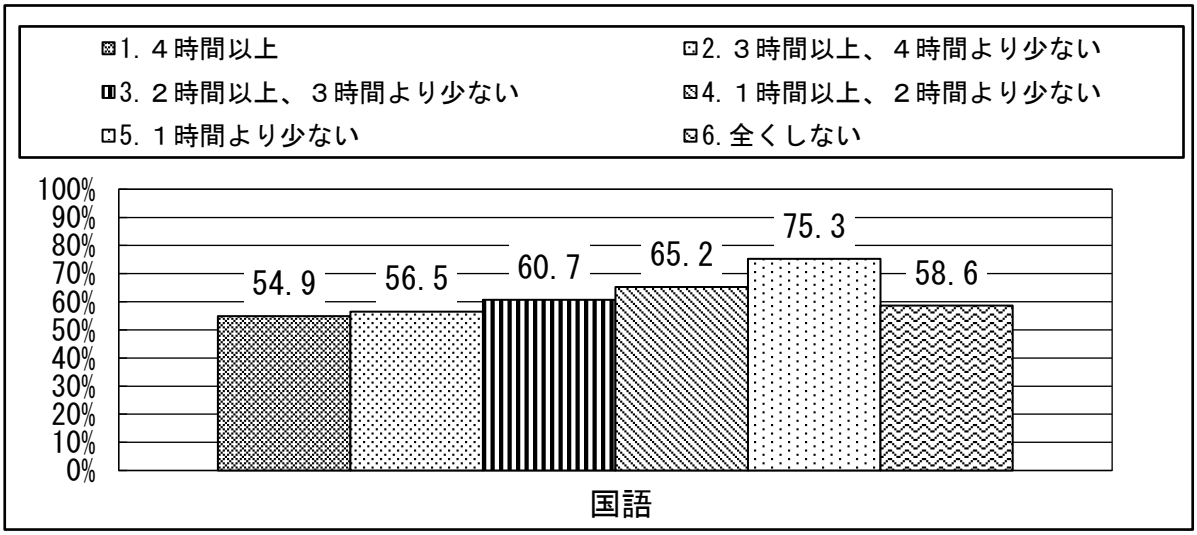


（図１）小学校



（図２）小学校

・次のグラフ（図３）は、小学校の「普段（月～金）１日当たりどのくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか」と学力調査の正答率の関係である。



（図３）小学校

・「ゲームをしている時間が１時間より少ない」子どもの正答率が最も高い。ゲームをしたり、SNS や動画を見たりする際は、家族で約束を決めたり、自分で時間を決めたりして、それを守って学習する習慣を身に付けさせることが大切である。

(4)　地域や社会との関わりについて

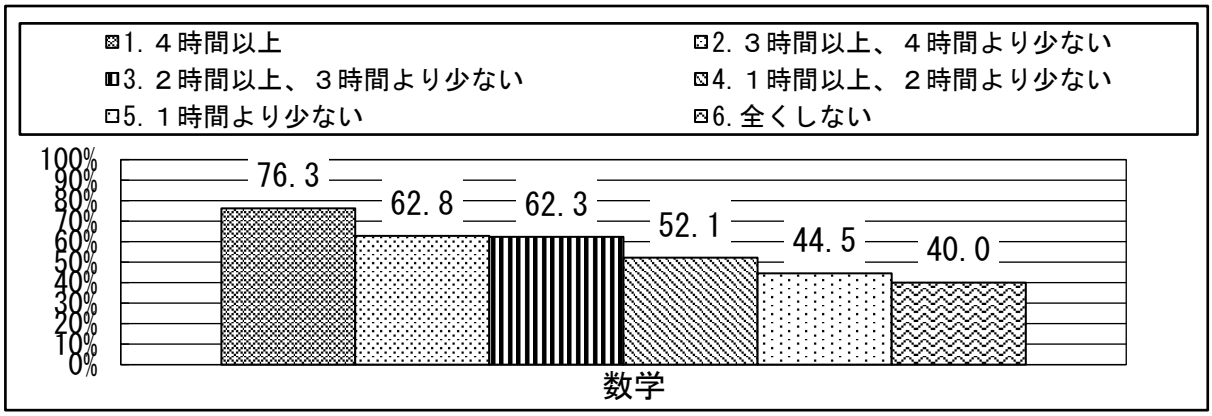
・「放課後や週末に地域の活動に参加している」児童生徒は、全国や県と比べて多

い。地域ぐるみで児童生徒の健全育成が図れるよう、児童生徒が参加できる場が充実し、子どもの関心も高まっている。

・「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」児童生徒が、全国や県と比べて多く、社会の出来事への関心も高い。

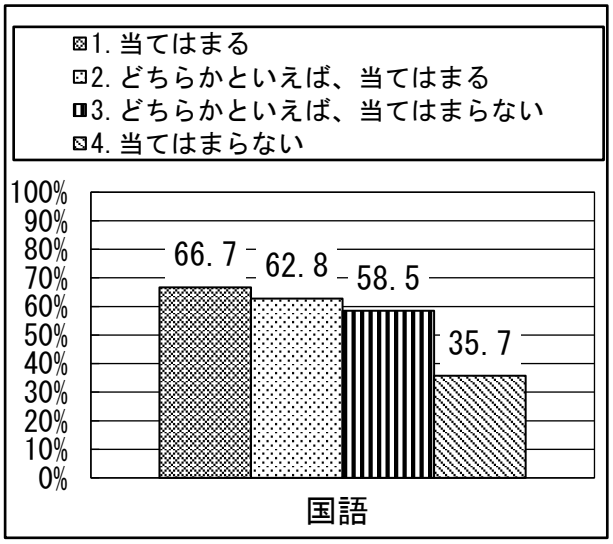
(5)　家庭学習の実施状況について

・次のグラフ（図４）は、中学校において、土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしていますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」と学力調査の正答率の関係である。家庭学習の定着が、学力向上つながると言える。

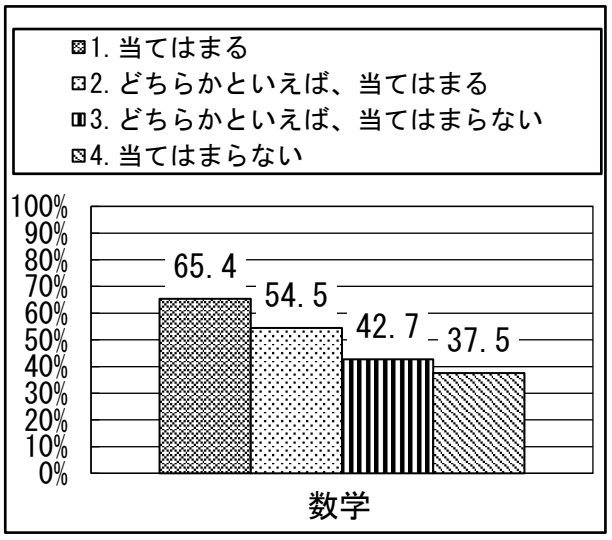


（図４）中学校

・次のグラフは、小学校（図５）と中学校（図６）において、「学習の内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」と学力調査の正答率の関係である。家庭学習においては、復習を大切にして行うことが、学力向上につながると言える。



（図５）小学校



（図６）中学校

(6)　自尊感情や自己肯定感について

・小学校、中学校ともに、将来の夢や目標をもっている児童生徒の割合は全国や県と比べて低い傾向にある。キャリア教育の一層の充実を目指す。

・「自分にはよいところがある」と自分のよさを自覚している児童生徒の割合は、小学校では全国や県と同等である。中学校では、全国や県よりやや高くなっている。自己のよさを見つめられるよう、成功経験ができる場や周りから認められる環境を学校･家庭･地域でつくりあげていく必要がある。

(7)　規範意識や道徳性の醸成について

・「いじめはどんな理由があってもいけないことだ」という意識が小学生、中学生ともに全国や県よりも高い。

・「携帯電話、スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている」という児童生徒の割合は、小学生、中学生共に全国や県よりも高い。

・小学校、中学校共に、「人が困っているときは、進んで助けている」という児童生徒の割合が、全国や県よりも高い。

(8)　学校における授業改善で大切にしたい取組について

・前年度までの学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器の活用について、「分からないことがあった時に、すぐに調べることができる」「楽しみながら学習をすることができる」という児童生徒の割合は、小学生、中学生ともに全国や県よりも高い。中学生においては、さらに、「自分のペースで理解しながら学習を進めることができる」「画像や動画、音声を活用することで、学習内容がよく分かる」という生徒の割合が、全国や県よりも高い。一方で、「友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」という児童生徒の割合は、小学生、中学生ともに、全国や県よりも低い。個別最適な学習において有効な活用が進んでいると言えるが、今後、協働的な学びにおいても ICT 機器を有効に活用できるように授業改善を図る必要がある。